

世に棲む日日 三

司馬遼太郎

三日月に棲む世

司馬遼太郎

文藝春秋刊



世に棲む日日三

昭和四十六年七月十五日第一刷
昭和四十六年十二月三十日第八刷

定価 五六〇円

著者 司馬遼太郎しば りょうたろう

発行者 桼原雅春

発行所 株式會社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三
電話東京二六五局一二二一

郵便番号一〇二

印刷 凸版印刷
製本 大口製本

万一落丁乱丁の場合はおとりかえ致します

© 1971 Ryōtarō Shiba

0093—360860—7384

Printed in Japan

目次

談判 5

ヤクニン 16

彦島 28

脱走 40

ともし火 51

海風 64

堺屋 76

山県と赤根 87

長府屯営 99

功山寺拳兵 110

襲撃 121

絵堂の奇襲 144

反乱 155

進発 132

V 路上の戦闘 167

御堀耕助 179

攻勢へ 190

政戦 201

兵威 212

海峡の春 223

転換 235

逐電 246

風伯 258

浮世の値段 270

吞象楼主人 282

金毘羅船 293

お雅と 304

総督夫人 316

断交 328

航走 340

一字三星旗 351

老年 363

装帧

三井永一

世に棲む日日三

談 判

——戦後、長州をどう始末するか。

ということについて、英仏米蘭四カ国の公使は、すでに横浜においてうちあわせ済みであった。

この十九世紀の欧米人の政治思想にあっては、戦争による武力誇示以上に有効な外交手段はないと信じられていた。このばあいも、

「長州藩を武力でうちのめして、日本を開国へ転換させる」

というのが目的であった。英国公使のオルコックは、この武力行使については徹底した考えをもっており、クーパー提督に、

「長州の首都は、萩である。萩の死命を制せねば長州藩は参らないから、かならず萩を攻撃せよ」

と、命じていた。が、この連合艦隊の司令長官であるクーパーは、萩を占領するだけに必要な陸戦兵力がないという理由でそれは不可能だとおもった。せいぜい下関付近の海岸砲台を粉碎することと、できれば下関の一部を占領してしまうことぐらいが可能であるとおもい、「作戦行動については武官

である私にまかせてもらわねばならない」と同公使に返答した。

「彦島」

という島が、下関港の西に浮かんでいる。英国人の感覚でいえば、長州藩からこの島をうばうことによって、香港のような貿易基地にすることがのぞましかったが、しかし他の三国を出しぬいて英国だけがこの島をうばうことはできない。このため四カ国共同で島をおさえようという申しあわせが、すでに横浜における四カ国公使の会議で出ていた。このことにつき、英国公使館の通訳官アーネスト・サトーはその著書のなかで、

「四カ国公使の計画の中には、賠償金の保障として下関付近を占領するという考えがあったのを私は知っていた」

と、書いている。もっともサトーは、「占領したあと幕府に返上するつもりだが」という一項を入れているが、いったん返上して同時に永久租借するつもりであったことはまちがいない。下関・彦島という、商業眼からみればじつに華麗で旨味のある地理的情景が——列強の極東政策の感覚でいえばあの宝石のような香港、厦門、上海の原石のように——映じていた。

さて、事態が急転した。講和の段階に入った。旗艦ユリアラス号では、提督以下が、長州藩代表を待った。

「間もなくその高官は、旗艦の後甲板にのぼってきた」

と、サトーは書いている。高官というのは長州藩家老穴戸刑馬のことである。

晋作であった。

天才的な外交感覚と語学能力をもった若い通訳官アーネスト・サトーは、

「宍戸刑馬」

というような家老が長州藩にいないことをすでに看破していた。二年前に日本にきてはじめて日本語に接したサトーは、いまでは、

「武鑑」

というようなものさえ読めるようになっていた。武鑑とは、徳川体制における大職員録というか、あるいは紳士録ともいうべきものである。諸大名や幕府役人、旗本についての諸項目を書きこんだ便覧で、たとえば大名ならその氏名、官位、石高、家紋、居城、江戸屋敷の所在地、それに家老たちの氏名がくわしく出ている。江戸期もこの時期になると出版文化のにぎわいは、印刷技術の相違があるとはいえ、ヨーロッパにくらべてさほどの劣りはない。武鑑は、江戸や大坂の本屋による商業刊行物であった。サトーも、それをもっていた。その武鑑で、

「長門宰相慶親卿（長州藩主毛利敬親のこと）」の項をひくと、家老は二十人いる。宍戸備前、毛利筑前、毛利能登、毛利出雲、毛利豊之進、毛利隠岐、益田右衛門介、福原越後……といったぐあいに見て行っても、宍戸刑馬という者はいない。が、サトーはそれについては深く問わないことにした。

「後甲板にのぼってきた宍戸刑馬は」

と、サトーはその服装についてのべ、とくに、

「下着の絹はみごとに純白であった」

と、印象的に書いている。サトーはこれだけの日本通でありながら、この人物が高杉晋作という長州きつての英傑であるというふうには触れていない。サトーはのち明治十八年から同二十年にいたるシヤム駐在公使時代に、この日本における回想記を書いたのだが、その回想記を書いた時期、西郷隆盛については最大級の敬愛を寄せていたようだが、高杉晋作という人物についてはその名前も知らなかった様子であった。むろんこのとき、宍戸刑馬はじつは高杉晋作であるとは、サトーは知らない。

長官室で、双方が対面した。

英国側は、クーパー提督とその他、通訳はサトーほか二人である。長州藩は代表の宍戸、のほかに副使が二人おり、通訳の伊藤俊輔がぬけ目のない視線をテーブルのまわりにくばっていた。

宍戸の様子については、サトーは、「魔王のように傲然とかまえていた」と、描写している。

晋作は、副使の手を通じて例の「日本防長国主」という名による「講和書」というものをさしだした。サトーが他の二人の通訳と相談しつつ翻訳し、その英文をクーパーに渡した。クーパーがあきれたことに、「日本防長国主」の文書内容はただいままでの攘夷についての釈明をしているだけで、降伏するともなんとも書いていない。

「これでは問題にならない」

と、司令長官クーパーが、鳶色の目を晋作にむけていった。クーパーのいうところでは、チョウシユウは負けた、あなた方は降伏すべくやってきている、だから謝罪状を持ってこなければ交渉に応じ

られない、というのである。

「コウサン」

という言葉を通訳のサトーは使った。降参したという言葉がこの文書のどこにも書かれていない、といった。それをきくと、魔王はサトーをわざと黙殺し、クーバーをじっと見つめ、やがて、

「それでいいのだ」といった。

「わが防長国主の文書には、外国艦船の下関海峡通過は以後さしつかえない、と書かれている。それが講和という意味なのである。いま通詞は降参々々といわれるが、日本語にあっては降参とは戦に負けたときにつかわれる。考えてもご覧じよ、長州藩はべつに戦に負けてはおらぬではないか」

といったから、クーバーもサトーもおどろいた。

クーバーは笑いだし、船窓にみえている海岸の風景を指さし、あれでも負けていないと貴官はいうのかね、といった。砲台は破壊され、そのことごとくが陸戦隊によって占領され、大砲も鹵獲されるか、海にすてられるかしている。

魔王はゆっくりうなずき、しかしおなじことをいった。

「負けていない」

晋作のいうには、砲台の五つや六つどころか、もっと欲しいと言われるならいくらでも差しあげる。戦いの勝敗というのはそういうものではない、貴艦隊の陸戦兵力はわずか二千や三千にすぎぬではないか、わが長州藩はわずか防長二カ国であるけれども、二十万や三十万の兵隊は動員できる。本気で内陸戦をやれば貴国のほうが負けるのだ、われわれは講和する、しかし降参するのではないというこ

とは右のとおりである、と朗々とひびく語調でいった。クーバーはそれをサトーから英語に直されてきたとき、声をあげて笑った。クーバーにすればどっちでもいい。要するに長州は負けて講和を申し入れてきているのである。

「ただこの文書に」

と、クーバーはいった。

「毛利さんの署名がないのはよろしくない。日本防長国主という肩書きだけではこういう場合、通用しない。それに、毛利さん自身が出てこなければならぬ」

それはそうであろう。日本の殿様というのはいさう尊大だが、クーバーもまた大英帝国の国王の代理者である。毛利侯の家来と話さねばならぬような立場ではない。

「君公は、病氣中である」

と、魔王はいった。そのうえ、家臣団が京都へ乱入した罪により勅勘を得、謹慎中であっていつさい公おおよしの場所に出ることを謹んでいる、といった。このことは、サトーにはよく理解できた。かれは日本の刑罰の風習として「謹慎」という奇妙なものがあることを知っていて、その刑罰というのは自律的にみずからを自宅監禁の囚人とするもので、門前に青竹を組み、窓を釘付けにし、門を閉じて外部との往来を避ける、という奇習であった。この奇習慣は、ふるくからヨーロッパでの日本紹介書に出ていて、

——日本人は警察を必要としない、なぜならみずからを罰するから。
という俗説まであることをアーネスト・サトーは知っている。

あとこまかい条件が議題に出たが、この日はいわば交渉団の顔あわせという意味があったから、結論を得るところまで行っていない。

最後にクーバーは、もっとも重要な議題を出した。賠償金のことであった。西洋の慣習として戦いに勝ったほうが、敗者に勘定書を差し出す。勝利に必要なだったいっさいの経費を敗者に支払わせるというもので、ヨーロッパにあつては戦争であれ、民事訴訟であれ、この道理はかわらない。横浜から下関まで艦隊がやってくることに要した薪炭費、船の消耗についての費用、兵員の給料、八人の戦死者と三十人の戦傷者についての賠償、撃った砲弾の費用などである。

「三百万ドル」

と、クーバーはいった。それまで、傲然としていた魔王はこれには閉口したらしく、はじめて顔を伊藤のほうにむけた。長州藩が五十年かかっても支払えないほどの巨額であった。

伊藤は、しゃべりはじめた。伊藤の英語はおそろしく粗末で、クーバーには十パーセントも理解できなかった。要するに長州藩は三十六万石とすこしの収穫高にすぎない。そのうちの半分は農民のもので、他は多くの家来を養うためにつかわれる、藩主みずからの収入は六万石ほどにすぎず、これによって軍備費などにあてねばならない、そういうことであるから、とうてい返済能力はない、と伊藤はいった。

クーバーは教師が少年に話すような調子で、

「戦争というものは最初から金の計算をしてからはじめるべきものなのだ。長州人が攘夷をやるのもいいが、負けたときにはどの程度の賠償金を出さねばならないかということを計算し、それをもって

は始めるべきであつた。いまさら金がないというのは、世界の通念がゆるさない」

「なるほど」

魔王は西洋人の考え方がおもしろかつたらしく、ひざを大きく打って感心してみせたが、しかしつぎに言いだしたことは、提督にとって意外なことであつた。

「水師提督（クーパーのこと）の申されることはよくわかつた。しかしわが藩がおこなつた攘夷はわが藩の意志でおこなつたものではない。朝廷と幕府の命令でおこなつたのだ。わが藩は単に鉄砲にすぎない。射手は幕府である。その三百万ドルは、幕府が支払うべきものである」

晋作のいうことに一理があることは、日本の政情にあかるいサトーにはわかつてゐる。幕府は、文久三年の当時、長州藩が後押^{あとお}ししていた朝廷に押しまくられ、窮したあまり攘夷命令を出した。他の藩は幕府のそういう立場を知っていたから攘夷を断行しなかつたが、長州藩のみはやつた。従つて長州藩の攘夷は幕命によるものであるということとは法解釈風に考えて十分に成立することなのである。

しかも、魔王らは用意のいいことに、朝廷と幕府の攘夷命令書をちゃんともつてきていて副使の渡辺という者がそれを卓上に置いた。

「よからう、償金の件は幕府に交渉する」

と、クーパーがあつさりいったのは、幕府からなら取りはぐれがないとみたのである。幕府はこれをいやと言えないということは、英国人たちはよく知つてゐた。この日本国の政府というのは奇妙な

体制で、じつは徳川家という「家」なのである。徳川將軍は中国やヨーロッパのような皇帝ではないということ、サトウの洞察によって英国だけはそう解釈を確立していた（これとは逆にフランスはあくまでも徳川將軍をその崩壊まで皇帝とみており、この政体解釈の差が、対日外交における英国の勝利——フランスに対して——をもたらしした）。英国の解釈では、徳川家は単に大名の最大のものにすぎず、將軍とは大名群の「盟主」であるにすぎない、というものである。ところが、フランス人から仕込まれた幕府の役人は「大君（たいくん將軍）は大名に対し絶対君主である」と擬装していた。この擬装があるために、たとえばこんどの三百万ドルの賠償金にしても、

「それは長州藩がやったことで、幕府にはなんの責任もない」

といってしまう、長州藩は独立国家であることになり、またその解釈をひろげれば三百諸侯はみな独立国家であるということになって、幕府は日本唯一の正式の政権であるという大きな建前がくずれてしまう。このため、幕府は長州がやったことでも尻ぬぐいをせねばならないのである。一昨年、薩摩侯が行列を組んで行進中、神奈川の近くの生麦村（なまこむら）で外国人が前方を横切ったということで、かれらを殺傷した。その賠償も幕府が払わざるをえなかったのは、払わなければ徳川將軍の君主権（世界のどこにも類似形態のものがない）というものが、法解釈の前で大崩壊するからである。こんどの三百万ドルも幕府が支払うにちがいないとクーパーは見た（げんに幕府は年賦返済で支払った。幕府崩壊後は明治政府が肩代りした）。

この第一回談判は、みじかい時間でおわった。

翌々日ふたたび旗艦のこの部屋でひらかるべきことを双方諒承し、魔王らは艦を降り、艦のバツテ

ーラで海岸へ送られた。

あと、クーパーはサトーに、

「幕府の役人より、はるかにいい」

と言ひ、サトーもこの点は前からの持説であつたので、つよい同感を示した。サトーは、日本の人材は薩摩藩と長州藩にあつまつてゐるということを、かねてオルコック公使にもいつていた。オルコック公使は列強の公使は幕府の役人と接触するつど、その態度の煮えきらなさと面従腹背のうそつき外交に業をにやした。ところがイギリス艦隊は去年鹿児島^{さつご}の錦江湾^{きんかうわん}において薩英戦争をやり、勝敗の点では互角であつたが、結果としては講和になつた。このとき鹿児島城下ではじめて薩摩藩士と接触し、その態度の歯切れのよさと、約束はかならずまもるといふ点において、幕府役人とくらべ、これがおなじ日本人種かと思うほどにおどろいた。サトーは、幕府役人の立場上のつらさに同情的でなく、むしろそれを第一に無能によるものと解釈し、さらには幕府役人が肚^{はら}と言葉のちがう日本の伝統的外交のみでやってくるのに対し、薩摩人はきわめて態度が明快で、その言葉はヨーロッパ人のことばのごとく信用できる、とサトーはみた。サトーはこんど長州人にはじめて接し、鹿児島城下でもつた感想とおなじ感想をもつた。

「長州人はさすがに休戦の条件を忠実に守つた」

と、その回想録に書いている。

のちにサトーが、

「英国は幕府を相手にすべきではない。薩長を相手にすべきである。日本は早晚革命がおこらざるを